

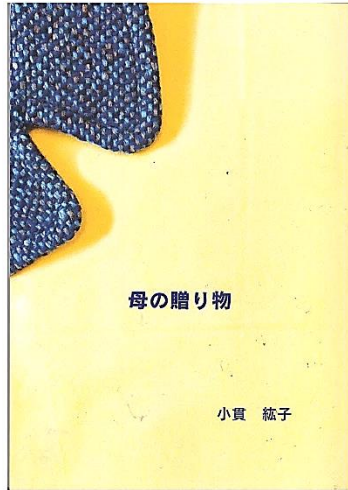


小貫紘子著『母の贈り物』を読む

内藤 真治

戦争で母と子は……

『女の一生』という題の作品はたくさんありますが、小貫紘子さんの『母の贈り物』を読んで私は新しい『女の一生』を読んだ気分になりました。小貫さんはフォーラムの近現代史ゼミヤスタジイ楽書会に参加すると共にいろ



いろな合唱団にも参加している活動的な女性で、本誌にエッセイを連載しているエイムズ唯子さんのお母さんです。

本書は紘子さんの母・久子さんの生涯を語りながら、おのずと著者自身の生き方をも浮かび上がらせる「二人分の女の一生」です（著者の人生はこれからも続きますが）。

執筆の動機は生前の母・久子さんから3冊の手帳（日記）を託されたことでした。

1944（昭和19）年9月最初の記述です。

「十日（日）主人に召集来る。義弟発病す」

父の守義さん 29 歳、老兵とは言えぬまでも初の入隊にしては若くない、根こそぎ動員の始まりです。親子3人は横浜に住んでいましたが、本籍地である秋田への入営でした。

「十月五日 今日からは紘子と二人の生活なり。帰ります日まで慎ましく生き抜こう」

著者は満1歳を迎えたばかりです。

私は「里の秋」という童謡を思い出しました。

一 しずかなしずかな 里の秋
お背戸に木の実の 落ちる夜は
ああ かあさんと ただ二人
栗の実 煮てます いろりばた

二番でも三番でも「とうさん」は不在です。

調べてみたら、四番まであった歌詞はもともと

椰子の島にいる「とうさん」の武運長久を祈り、大きくなったら僕も兵隊になって国を守るよという戦意高揚の詩でした。作者は小学校の教師で日本が米英に宣戦布告した1941年の作品です。最初の題は「星月夜」、作者は高名な作曲家・海沼実氏の作曲を希望したが、海沼氏は応じませんでした。歌詞の後半で子どもを戦地に送るくだりが作曲者をためらわせたのかもしれない。

1945（昭和20）年8月3日の日記。

（連日の空襲に）「もし、これで最後になってしまったら、私は、紘子とともに夫のことを思いつつ、楽しく死んでいったと思って下さい。結婚以来、二年有余、短かったけれど、主人あるがゆえに、楽しい、生き甲斐のある日々だった。…」

覚悟の遺書ともとれます。

そして8月15日（火）

「意外なことに、意外なことに、なんと、無条件降伏とは。今まで夫を出した苦労も水の泡である。涙ばかり出る。なんと情けないことか。フィリピンの夫は、無事帰ってくるのであろうか」

作曲家の海沼実（代表作に「お猿のかごや」「みかんの花咲く丘」など）は戦後すぐにNHKから新曲を依頼されると「星月夜」を思い出し、作者を呼んで三、四番の改作を依頼します。大急ぎで作られた三番が、

三 さよなら さよなら 椰子の島
お舟にゆられて かえられる
ああ とうさんよ ご無事でと
今夜もかあさんと いのります

題も「里の秋」と変え、川田正子が歌って放送されると大反響、NHKのラジオ番組「復員だより」、のちに「尋ね人（の時間）」のテーマ曲としてラジオから流れ続けました。

しかし「小貫家のとうさん」はとうとう帰りませんでした。しばらくして母のもとに届いた白木の箱には「頭部貫通銃創にて戦死」と書かれた白い紙切れが一枚、入っただけだったそうです。小貫家の墓には母が後年フィリピンを訪ねて持ち



紘子1歳の誕生日に

帰った土だけが入っているとのこと。三冊の手帳にぎっしりと書き込まれ娘に遺した母の日記は昭和20年12月で終わっています。

著者の紘子さんが1歳の時に召集され、そのまま帰らなかった父はなぜ死ななければならなかったのか。

昭和史の「闇」に迫りたいと追究する原点を知った思いでした。

戦後の母は…

ひたすら夫の無事を祈り生還を待ち続けていた母・久子さんの戦後の変わりようは驚くべきものです。「女は弱し、されど母は強し」でしょうか。幼い紘子さんを抱えて、敗戦で混乱の極にある世の中を生き抜いていかねばなりません。本書の後半では、娘の目を通して見た母の奮闘ぶりが描かれます。

洋裁を勉強して小さな洋装店から、顧客のために完全オリジナル衣装をデザインするオートクチュール「サロン・ド・モード・ジャルダン」へと発展、お客には帝国ホテルで仮縫いをする外国人がいたし、婦人有権者同盟の市川房枝は小貫久子さんの作った服が最も気に入っていたといえます。

自らの勉強と同時に洋裁学校で教員実習をした久子さんは洋裁教室を開きます。やがて母は再婚、継父は仕事を辞めて母と共同で服飾専門学校の規模を拡大させていきました。

この間、娘の紘子さんは母子二人だけの暮らしから継父を迎えての新しい家庭に違和感を覚え、母への反発と不信感を育てていったといえます。高校のクラブ活動では社会科研究会に属し、60年安保闘争では高校生有志で「声なき声の会」をつくり国会デモに参加します。東大生樺美智子さんの死に大きな衝撃を受けたのは16歳の時でした。反対運動の空前の盛り上がりにもかかわらず、新安保条約が自然承認という形で成立し、紘子さんは虚脱感に打ちのめされます。

法政大学社会学部を卒業後に高校、大学の先輩だった男性と結婚、夫婦で母の服飾専門学校を手伝いますが、強い母と強い夫の間で紘子さんは苦労を重ねたようです。

しかしジャルダン洋装店と服飾専門学校の経営もいつまでも順風満帆とはいきませんでした。景気の動向もさることながら、服飾の世界はオートクチュール（注文服）からプレタポルテ（高級な既製服）へと変化したのです。服は作るものではなく、買うものになりました。当然、専門学校で学ぼうとする生徒さんの数は減少していきます。

紘子さんのその後と今

銀行からの多額の借入れに継父の急死、加えて母のアルツハイマー型認知症の発症。これ以後の著者の獅子奮迅ぶりはとても紹介しきれません。洋装店と学校を整理し、4億円もあった銀行からの借入れ金を完済しました。自身も離婚を経験し、介護15年の後、95歳でお母さんが亡くなります。紘子さんは女手一つで娘さんと息子さんを立派に育て上げました。

この強さは時に反発しながらも、お母さんから受け継いだものと思えてなりません。70歳を過ぎた頃、娘さんの唯子さんがいる群馬に来て、戦争と憲法に関わる勉強と合唱などの活動を続けておられます。

2015年には『東京新聞』が募集した「平和の俳句 戦後七十年」に応募し、

徴兵に不帰の夫(つま)待つ母の念

が掲載されました(3月18日付)。

本書の表紙は著者の娘・エイムズ唯子さんのデザインで、祖母の久子さんが仕立て愛用したツイードのジャケットから。更に各所に配された長谷川陽さんの挿絵がとても良い。長谷川さんはフォーラムの元運営委員でその後も唯子さんの寄稿に関わっています。

本書は私家版で市販はしていませんが、関心のある方は直接著者にお問い合わせください。わずかに残部があるそうです。

